

アウトソーシングによる研究の効率化と高度化 (S59)

アウトソーシングとは従来組織内部で行う業務過程を外部の企業等に委託する事で、経営資源を補完する方法の1つである。アウトソーシングを委託する側は、中心業務に集中できることから様々な業種で一般的になっている。例えば、プライマーやペプチドの合成、DNA シークエンスサービスなどの外注は一般的になっている。研究活動におけるアウトソーシングは、上記のような受託サービスや受託研究・解析を指すことが一般的であるが、共同研究や公的な技術支援も広い意味での研究のアウトソーシングであると言える。若手研究者にとって研究のアウトソーシングと直接関わる機会は多くないが、研究の高度化・効率化を求められる今日においてはその活用はますます重要になってくると考えられる。

近年、研究成果を論文等として学術誌上で発表するにあたって、複数の研究方法で多角的な検討を要求されることが多い。一般にレベルの高いと言われている雑誌はもちろん、専門誌においても生理学、生化学、分子生物学および画像解析など様々な研究手法が要求される。必要となる全ての研究手法と装置を自前で用意できればよいが、一部の企業や研究室を除き、全てをそろえることは金銭的、時間的、人的コストの面から不可能に近い。一方、科学研究費補助金などのほとんどの研究費では、期限内に確実な成果を求められるため、研究の学術的なインパクトはもちろんのこと研究成果を効率的に出すことも重要な課題である。また、オプトジェネティクス技術の発展と流行もあり、遺伝子工学や分子生物学的な手法を生理学研究に取り入れることが当たり前になっている。以上のように、生命科学研究を取り巻く環境においては研究の効率化・高度化のための選択と集中は必要であり、生理学分野においても研究のアウトソーシングは非常に重要な要素となりつつあることから、若手の会運営委員会はアウトソーシングをテーマとしたシンポジウムを企画した。

本シンポジウムでは4名のシンポジストの方にアウトソーシングを依頼される立場から講演して頂いた。第一演題では、松井博史先生に受託研究を業務とする研究者の立場から受託研究の流れとヒトのfMRIなどのイメージング技術を用いた医薬品開発・臨床研究の支援についてご講演頂いた。第二演題では、立花太郎先生に大学発ベンチャーの代表としての立場から、大学発ベンチャーについてとモノクローナル抗体作製受託サービスについてご講演頂いた。第三演題では、新熊忠信先生に受託研究を行う企業で働く研究者の生活や日常業務の流れについてご講演頂いた。第四演題では、宮川剛先生に共同研究を推進している大学の研究者として、そして公的な研究支援者としての立場から、遺伝子改変マウスの表現型解析についてご講演頂いた。以上4名のシンポジストの方々の演題を通して、研究のアウトソーシングのメリット、デメリットや効率的なアウトソーシングの活用方法についての示唆が得られた。また、学生やポスドクなど若手研究者にとっては、大学の研究者以外の進路の例として、大いに参考になったのではないかと思う。

例年若手の会運営委員会シンポジウムでは、ポスドク問題、研究環境、新技術の教育など様々なテーマでシンポジウムを開催させて頂いている。このようなシンポジウムが開催できるのは、生理学会理事会と大会長のご理解とご支持があつてこそで、この場を借りてお礼を申し上げたい。そして、今後も若手の会運営委員会らしいテーマ設定でのシンポジウムを継続することによって、生理学会大会を盛り上げていきたい。

本シンポジウム発表について、開示すべき利益相反関係にある企業等はない

オーガナイザー：上窪 裕二 (順天堂大・医・薬理)

和田 真 (国リハ研・脳機能部・脳神経)

シンポジウム (S59) の各シンポジストの発表要旨は WEB 版をご覧ください (筆頭著者名・講演タイトルは以下のとおりです)。

松井博史『イメージング技術を用いた医薬品開発・臨床研究の支援』P.70

立花太郎『大学発バイオベンチャーによるモノクローナル抗体作製受託サービス』P.70